



ケビン・ショート教授とツアーに参加した子どもたち



NPOさとやま理事で本学卒業生齋藤裕さん

おおたかの森探検ツアーで、自然を体感

5月4日に、東京情報大学ケビン・ショート教授をガイドに招いて行われた「おおたかの森探検ツアー」もNPOさとやまの活動の一環だ。子どもたちは、森の植物や生物を、触ったり見比べたりしながら、自然観察の楽しさを体験した。「答えを押し付けるのではなく、じっくり自分の頭

で考えさせ、自然に触れあうことが重要」と同教授。「こうした活動で、市野谷の森が地元民と生物たちの憩いの場となれば」と齋藤さん。参加者にはリピーターも多く、「子どもが実際の自然に触れ合える場は本当に貴重。また来年も機会があったら来たい」と親子たちにも好評だった。

実際には市野谷の森(通称「おおたかの森」)で撮影された動物植物の写真や展示物のなかで、特別目を引いたの

卒業後は博物館の協力員などを経て、環境コンサルタント会社に勤務するかわら、同NPOで、市野谷の森を中心に、生物調査や森の手入れ作業、そして原則、毎月第一日曜日に自然観察会を行っている。

「流山おおたかの森駅周辺は近年の急速な開発で、新たな居住者が年々増えてきています。そういった人たちに市野谷の森の存在を知ってもらいたい」と齋藤さんは思いを話す。

だ。在学中には「環境エコロジカルネットワーク愛好会」というサークルで、生物調査やゴミ拾い、分別活動などの活動も行っていた。

一刻も早く実現させるため、1万5365人もの署名を集めた。それまであまり注目されず、市の発展に合わせて消滅していきかけたこの森に、齋藤さんたちの呼びかけで再び注目が集まった。

市野谷の森は平成11年に県立公園として整備する計画が決定されたが、18年以上経過した現在も実現していない。公園予定地内の営業場所に近い民有地で、野外活動を行う団体が木を伐採したこともあった。

同NPOは県立公園化を

4月29日から5月4日まで、流山おおたかの森駅南口都市広場で開催された流山グリーンフェスティバル(同実行委員会主催、流山市共催)に、流山市にある市野谷の森を中心に自然保護活動を行っている「NPOさとやま」も展示ブースを出した。同NPO理事で本学卒業生の齋藤裕(31)さんと同フェスティバル参加の意図を聞いた。(撮影:石井蓮 日高那侑 取材:文・石井悠大)

「オオタカ」が住む 里山を守る 江戸川大学卒業生

はオオタカの実物パネルだ。年ごとにオオタカが無事巣立ったかどうかの観察記録も展示されていた。

その活動の一環として、オオタカの繁殖状況の調査を行っているが、一昨年、そして昨年はオオタカが巣立つことはなかった。その背景には、森を取り巻く環境の変化があるという。森はこの20年近くで面積を急激に狭めている。急激な地域開発が原因だ。

齋藤さんは高校3年生の時に学んだ環境問題の授業で生態学に興味を持った。江戸川大学環境デザイン学科(現:現代社会学科)在学中は吉田正人教授のゼミで生態学、環境教育を学んだ。

市野谷の森は平成11年に県立公園として整備する計画が決定されたが、18年以上経過した現在も実現していない。公園予定地内の営業場所に近い民有地で、野外活動を行う団体が木を伐採したこともあった。